

小野ゼミという虎の穴

第12期 小野寺 隆志

小野ゼミでの2年間は、自分なりに覚悟を持って入会したが、まさに猛虎が控える「虎の穴」に裸一貫で放り込まれたようなものであった。それは、コトラーやSASのレポートしかり、タスクの多さしかりでいえるであろう。しかし、この「虎の穴」にただ私1人だけで放り込まれたわけではなかった。例えば三田祭論文の執筆にあたって、論文代表であった平塚君、林さん、北島君、そして上谷君を含む同期が、特に直前期、それこそトラウマになるほど学校前のガストに籠って苦学を共にしてくれたからこそ、初めての論文をなんとか完成させることができたように思う。また、卒業論文では、恥ずかしながら荒井君や平嶋君、そして羽佐田君は自分の卒業論文が完成していたにもかかわらず、とても温かく手伝ってくれたからこそ本当に感謝に堪えない。



インゼミ後の懇親会にて（著者は前列右）

このような活動を振り返ると他のゼミでは到底手に入ってはいなかったであろう「猛虎の対処方法」が自然と身についていた。加えて、このような厳しい活動を共に重ねてきたからこそ、一生付き合っていきたいと思える温かい同期というかけがえのない「虎子」を手に入れることができたように思う。そしてこの2年間でなんとか乗り越えることができたのは、様々な方のご尽力を頂いたからに他ならない。第11期生の先輩方には、礼儀作法すらあまり弁えていなかった私たちを、とても熱く、時には寝る間を惜しんでご指導頂きました。誠にありがとうございました。大学院生の方々には、最後の最後まで未熟な私を見捨てずにご指導して下さいましたこと、本当に感謝しています。そして特に小野先生には、いつも「虎の穴」の暗闇にいて行先も覚束なかった私に常に手取り足取り教えて下さり、私を正しい道へと導いて下さったこと、本当に感謝しています。

また、後輩である第13期生と出会えたことも私にとって、本当に貴重な出会いだったように思う。それは、第11期生の方々から私が頂いた熱烈なご指導・アドバイスには及ばないものの、1人の先輩として後輩に何ができるのかを必死で考え抜き、その考えをどう伝えれば良いのかという経験をくれたことに尽きると言えるであろう。

これからは、小野ゼミで得た「虎子」と過ごした日々を忘れずに、また小野ゼミで得た経験を活かしながら小野ゼミ以上に厳しいと思われる「虎の穴」である社会人生活を歩んでいきたいと思う。